



矢崎家住宅(市指定文化財)

徳島堰を完成させた矢崎又右衛門ゆかりの住宅です。徳島堰が開削された頃と同じ、寛文年間に建てられたものと考えられ、現存するものでは甲府盆地西側で最も古い民家と考えられています。



昭和30年の徳島堰

コンクリート化される前の石積みで護岸された徳島堰の様子。石やしがらみで護岸されただけの素掘りでした。写真からは周囲に桑畑が広がっている様子がうかがえます。



昭和29年、先行して米レインバード社製のスプリンクラーが飯野に設置されました。

ふるさと
の156
誇り



まよ 博レポート



徳島兵左衛門の木像(了円寺所蔵)

徳島堰 350年①

写真・文 文化財課

しかし、この堰ができて水田を営むまでの十分な水が供給できなかったのが原七郷(※)と呼ばれる地域で、「原七郷はお月夜でも焼ける」の言葉が表す通り、水の乏しい土地と言えます。ただし、徳島堰の水が溜池に通水されて貴重な生活用水として利用されたり、在家塚の一部では通水に成功して水田が営まれるなど、直接的・間接的に扇状地に多大な恩恵をもたらしたのです。また、徳島堰は生活の一部でもありました。お風呂の水くみや洗いのもの、さらには夏は泳ぎ、冬はスケートを覚える場でもあったなど、この徳島堰を舞台にさまざまな「暮らしの風景」が生まれていて、地域の方の記憶に刻まれているのです。

徳島堰は、石等で一部護岸されただけの素掘りの水路で、水が浸透・漏水しやすかったため、昭和四〇年(一九六五)から、釜無川右岸の土地改良事業が着手され、徳島堰のコンクリート化が始まり、安定した水量を確保できるようになりました。さらに、その水を利用したスプリンクラーが扇状地全体に張り巡らされ、現在の南アルプス市のフルーツを育てているのです。三〇年前に先人たちの人力によって完成された徳島堰が、まさに今の南アルプス市のフルーツ産業を支えているのです。

果樹栽培の主な舞台となる御勅使川扇状地は、昭和四十年代にスプリンクラーが設置されるまで、月夜の弱い光でさえ日照りをおこすと言われた、国内でも有数の乾燥地帯でした。水害が多発する一方で、広大な範囲に御勅使川が運んだ砂礫が厚く堆積しているため、透水性が大きく、水を得ることが困難な土地なのです。そのため、水の獲得は扇状地に暮らす人々にとっての再優先課題でした。こうした過酷な環境を切り開き、土地の特徴を生かした独特な文化を育みながら、現在の果樹栽培へと暮らしをつないできたのです。

その難局を乗り越える大きな画期となったのが「徳島堰」の開削です。御勅使川は、元々水量が少ない上に上流部で水田に水を使うと、その水を広く行き渡らせることはできません。そのため、徳島堰は、御勅使川ではなく、釜無川の上戸井・釜崎から取水しているのです。寛文五年(一六六五)、江戸深川の徳島兵左衛門が工事に着手し、二年後の寛文七年には曲輪田まで通水したと言われます。その距離約十七km。しかし、同じ年に起きた二度の大雨のため堰の大部分が埋没したと言われます。これを機に兵左衛門は事業を断念し、この地を離れてしまいました。

事業を引き継いだ甲府藩の甲府城代戸田周防守は、家臣の津田伝右衛門と有野村の矢崎又右衛門に堰の改修を命じました。矢崎又右衛門は私財を投じてこの復旧工事に取り組み、ちよつと今から三〇年前の寛文十一年(一六七〇)、ついに完成させます。堰が完成したことにより、堰にほど近い村では新たに畑や水田が作られ、六科村や有野村などでは石高が増加し、飯野新田や曲輪田新田などの新しい村もできました。

ふるさと〇〇博物館公式マガジン
「〇博 LLL」
「特集 御勅使川の扇状地に生きる！」



南アルプス市の地域の歴史を深掘り!
価格:100円
ふるさと文化伝承館(木曜休館)、重要文化財安藤家住宅(火曜休館)、市教委文化財課(平日のみ)にて頒布。

ふるさと文化伝承館テーマ展
「開削350年 徳島堰」



会期
令和2年
7月17日(金)
〜
令和3年
4月18日(日)
御用旗

徳島堰の歴史はもとより、当時の社会背景や施工技術、住民の暮らしとの関わりなど、豊富な史料と民具類で多角的にご紹介します。矢崎家所蔵の絵図や了円寺所蔵徳島兵左衛門像などを公開。そのほか期間限定の特別公開も計画中。

※原七郷:上八田、在家塚、西野、桃園、上今井、吉田(十五所・沢登を含む)、小笠原